

スティーブン・リービーの日本見聞記(2)

Where's the Venture Capital?

### 一億総「リスク嫌い」

起業家精神を支える土壌がないから資金もない  
日本版ヤフーが育つ日は果たして来るのか

スティーブン・リービー(本誌テクノロジー担当記者)

神保哲生は戦士だ。彼は1996年、主にインターネット上でニュース映像を放送する日本ビデオニュース社を設立。国の規制下にあるテレビ業界に切り込もうとしている。めざすは日本版テッド・ターナー(CNNの創設者)だ。

しかし、今の神保は思いもよらぬ役回りを演じさせられている。ベンチャービジネスに資金が集まらないという、日本の病根を象徴する存在になってしまったのだ。神保のような起業家にとって、日本は居心地のいい国ではない。

神保はこれまで、リスクを恐れず生きてきた。90年代初め、彼はAP通信の東京特派員の職を辞して、自称「日本初の本格派ビデオジャーナリスト」になった。そして、アメリカの経済専門テレビ局CNBCと提携し、日本語ニュースを制作するようになる。

だが、97年にCNBCが日本経済新聞社と手を結ぶと、神保のニュースは必要なくなった。そこで彼は、インターネットに活動の場を移したのだ。

多額の資金を集めるなどという、甘い幻想はいだかなかった。「日本にそんな伝統はない」と、神保は言う。「銀行は事業計画を見ようもしないし、見ても評価するすべがない。担保がなければ金は借りられない」

### 有望な新技術を生かせない

神保の事業はそれなりに順調だ。地方のテレビ局に番組を配信しているし、NTTドコモが次世代携帯電話サービスを開始すれば、ニュース配信は重要なコンテンツになる。小泉純一郎首相の就任会見では、普通では見られない未編集の映像を放送して話題を呼んだ。それでも彼が手にした資金は、政府のわずかな

融資を除けば、創業時の資本金くらいだ。

神保のケースは極端な例かもしれない。しかし、日本に来てからの短い間に、私は同じような話をいくつも聞いた。

日本には有望な新技術はいくらもあるのに、起業家精神を支える素地ができていない。21世紀の経済成長には起業家精神が不可欠だし、日本政府は規制緩和に真剣に取り組んでいる。

ところが話が金融業界に及ぶと、誰の口からも「リスク回避」という言葉が飛び出す。銀行はこれまで、何兆円も無駄な融資をしてきたというのである。

リスクを恐れているのは金融界だけではない。中小企業総合事業団の調査によると、日本人の6割が「起業家を評価する」と回答。だが、身内の起業には4分の3が反対している。因習に縛られないはずの18~25歳の世代でさえ、3分の2が反対と答えている。

起業家への偏見など、もはやないと思われていた。ソフトバンクの孫正義といったベンチャーの旗手が登場した2年ほど前には、日本のビジネスのやり方が変わったと言われたものだ。東京・渋谷にはハイテク・ベンチャーが次々と生まれ、シリコンバレーならぬビットバレーと呼ばれるグループを形成した。

ビットバレーの活動が最高潮に達したのは昨年2月。東京・六本木のディスコで開かれたパーティーで、孫が2000人を前に講演をしたときだ。だが、バブルははじける前に消え、ビットバレーの企業は倒産するか、生き残っても苦難の道を歩んでいる。

「ビットバレーの企業の99%は、ビジネスを始める態勢ができていなかった」と語るのは、イー・アクセスのCEO（最高経営責任者）、千本倅生だ。同社は高速インターネット接続のサービスを展開している。彼は「普通の人間にもできる」ことを示したくて起業したという。

## 普通の起業家に夢はあるか

だが、千本は決して普通の男ではない。電電公社（現・NTT）の要職にあった彼は84年、日本初の民間電話会社、第二電電（現・KDDI）を共同で設立。日本最大のIPO（新規株式公開）を実現した。イー・アクセスが起業資金を集められたのは当然だ。

とはいえ、こうした成功事例があれば、思い切って起業する人が増えるかもしれない。インキュベーターと呼ばれる起業支援ビジネスの出現や政府の支援策も追い風になるかもしれない。

だが問題は、コネもない普通の起業家が資本を手にし、最終的にブランドを立ち上げることができるかということだ。アマゾン・ドット・コムやヤフーのような会社が、日本にも現れるのだろうか。

この点、神保は懐疑的だ。不良債権の処理に追われた銀行が、中小企業に融資の返済を迫るのではないかとみているからだ。そこで手もちの資金が底を突く前に事業を黒字転換しようと、彼はビジネスプランを練り直している。

神保の夢はインターネットのニュース放送で既存のテレビ局を脅かすこと。高速のネット接続が普及するまで事業が続けば、それも可能だ。ベンチャーキャピタルに頼れないことは承知している。

Steven Levy

本誌テクノロジー担当記者。著書に『マッキントッシュ物語』など。ジャパン・ソサエティーの招きで2カ月間の予定で日本に滞在中。